



## 「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か 障害福祉の現場におけるスピリチュアリティの機能

著者	深谷 美枝
雑誌名	明治学院大学社会学・社会福祉学研究 = The Meiji Gakuin sociology and social welfare review
巻	153
ページ	37-71
発行年	2019-02-28
その他のタイトル	“ The Light from Eternity ” “ Eyes from the Beyond ” Function Spirituality in the Field of Social Work with the Handicapped
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/00003593">http://hdl.handle.net/10723/00003593</a>

# 「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か ——障害福祉の現場におけるスピリチュアリティ<sup>(1)</sup>の機能——

深 谷 美 枝

## 1 研究目的

2016年7月に起きた「相模原障害者殺傷事件」は筆者が実際若い日に支援した利用者が被害者となったことに加えて、福祉現場の職務環境等から見ていつかは起こりうるという予感があっただけに非常なインパクトをもたらした。そしてそのインパクトを共有した複数の領域の研究者らと、可能な限り冷静にそれぞれの専門性を重ね合うことの中から見出せる「知」を共有しようと試み、日本宗教学会第76回学術大会(2017)においてパネルディスカッション「宗教・障害・共同体—障害と共に生きることの共同性」(代表者安藤泰至)に参加した<sup>(2)</sup>。またその発表を基としてやや発展させたものを「宗教と社会貢献」誌に特集論文として各自改めて投稿した<sup>(3)</sup>。

その中で筆者は社会福祉現場の荒廃を論じた上で、卒業生を主対象として継続して来た一連の「燃え尽き研究」を基にして、スピリチュアリティこそが現場の荒廃の中でワーカーと利用者が「人間であるための最後の砦」であることを論じた<sup>(4)</sup>。またそれを裏付けるために3人のキリスト者障害福祉ワーカーのインタビューを実施してライフヒストリーの手法によって分析し、社会福祉現場の現状とキリスト教スピリチュアリティの機能を浮き彫りにして論文とした<sup>(5)</sup>。

本論はこれら一連の研究成果を踏まえつつ、その結論を批判的に検証したうえで理論的枠組みとし、更に深谷前論文で課題として積み残したキリスト教以外のスピリチュアリティのサンプル(浄土系仏教)を加えた上で、分析手法を替

えて分析し、障害福祉の現場におけるスピリチュアリティの機能を抽出しようと試みる。

## 2 内なる優生思想とスピリチュアリティ(別のまなざし)

### —安藤論文を手掛かりに—

宗教学をベースに生命倫理を研究する安藤は「障害と宗教」の問題に関心を寄せるようになった。その背景は生命倫理学への批判的な視座によるものであり、生命倫理学は「守るべきいのち(生命)」と「そうでないいのち(生命)」との間を線引きし、後者を切り捨ててきたことも否めない、と述べる<sup>(6)</sup>。この生命倫理学への批判は米国の障害者運動や障害学による批判に通底しているという。

そして相模原障害者殺傷事件では優生思想が問題視されたが、この優生思想は生命倫理学に内包されているのみならず、「内なる優生思想」として私たち一人一人を内部侵食している。優生思想は特殊な人の特殊な思想などではなく、(1)生まれてくる子どもには障害がない方がいい。五体満足を望むという親の希望 (2)(出生前検査で)実際に胎児が障害をもって生まれてくるのがわかった場合に、中絶を選択するという行為 (3)そういう場合、自分であれば中絶する(と決めつける)という考え (4)そういう場合はみんな中絶した方がよい、それが子どものためでもあれば親のためでもあるという考え (5)「障害者は不幸だ。生きていく価値はない」という考えに基づいた社会をつくる、まで連続体をなす意識である、と森岡正博(1998)を引用しつつ述べる<sup>(7)</sup>。そしてこの思想は「個人の選択」という見せかけをもっていようとも、あからさまな優生思想に基づいた国家的な優生政策によってもたらされるのと同じであり、個人の「選択」は真空で行われるのではなく、特定の社会の 価値意識や制度の下で行われる、つまり社会的に規定されたものである、と断ずる<sup>(8)</sup>。

その上で「優生思想に穴を開ける『別のまなざし』」つまり異なった価値観が必要であること、「『生きる価値のある人間』と『生きる価値のない人間』の峻別(優生思想)を乗り越え、そうした人々と共に生きる(同時に自分自身の有限性や弱さと共に生きる)には、『生み出すこと』や『できること』を『人間である』ことの条件とするようなものさしやまなざしとは『別のものさし』『別のまなざし』が必要であり、そこにこそ広い意味での宗教の役割がある<sup>(9)</sup>」と述べるのである。

具体的に安藤はここから、「別のまなざし」の具体例としてジャン・ヴァニエの著書「人間になる」<sup>(10)</sup>、イヴ・ジネストとロゼット・マレスコッティという二人の体育学教師の著書「『ユマニチュード』という革命」<sup>(11)</sup>、精神障害者の生活共同体として大きな注目を集めてきた「浦河べてるの家」のソーシャルワーカー、向谷地生良による「精神障害と教会」<sup>(12)</sup>を挙げる。三つのテキストではそれぞれ、知的障害者、認知症高齢者、精神障害者が主たる対象になっている。

ここまでの安藤の論に筆者は基本的に賛意を表すが、ここでふと立ち止まる。筆者が疑問を感じた点は以下の諸点であった。

- ①確かに3テキスト共に安藤の指摘するように似た価値志向性に基づいており、おそらくはキリスト教に端を発するスピリチュアリティであることが推察されるが、ユマニチュードに関してはそれが明示されていない。
- ②3つが、キリスト教スピリチュアリティ由来として、それは現場と中心的な実践者のスピリチュアリティの相互作用または往復によってかなり思想化されたものである。その上で「べてる」は一つの方法論化の途を辿りつつあり、「ユマニチュード」はケア哲学を持った技法であり、更に切片化されて紹介されている。それを(広義であるとしても)宗教がその役割を果たしているもの、と同定してよいのか。
- ③「思想化した(宗教的)スピリチュアリティ」あるいは価値観・人間観だけ

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

を取り出されて方法論化、技術化した場合において、果たして優生思想に抗して立つ力となるのか。

つまり、筆者の疑問点は、内なる優生思想に抗しうるスピリチュアリティ、あるいは宗教の力があるとするれば、それはより丸ごとの、全体性を持つものであり、よりダイナミックなものでなくてはならないのではないか、ということである。

### 3 筆者の視点 —「別のまなざし」を生み出す「彼方からの光」

筆者は前論文においてスピリチュアリティの機能を3人のキリスト者ワーカーの「語り」から抽出した。それは (1) 過剰な感情労働や人間関係の悪さ、業務の過大な負担感に耐えて心を守り、虐待やグレイゾーン支援に陥らないためのバッファーとして機能している「バッファー機能」 (2) 感情労働の過酷さや業務の過大な負担感を単なるストレスで終わらせず、自己洞察の深化に向かわせ、ワーカーとしての成長と人間性の深化をもたらす「深化機能」 (3) 難しい価値判断に際して判断の基準、規範を提供する「規範提供機能」 (4) ソーシャルワーカーとしての専門職倫理を支え内実を与えて実体化、下支えしたり、職場が非キリスト教系法人であっても親和性がある場合にはそのエートス(ミッション)と相互作用して実体化、下支えし、コミットメントを強めたりする作用がある「エートスの実体化機能」であった。

これらの機能にはスピリチュアリティを「別のまなざし」つまり「優生思想とは異なった人間観、価値観」として捉える以上の多くの要素が見て取られる。却って「別のまなざし」は「深化機能」や「規範提供機能」の一部に過ぎず、「深化機能」の中にそれを生み出す要素の存在が類推される。

安藤はレジユメ(2017)<sup>(13)</sup>の中で「有限な私たちがその有限性を徹底的に自覚したときに、そこに無限なものが開かれてくる(別のところから光が差して

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

くる)という『逆説的機能』にスピリチュアリティの本質があるのではないか?』という問いかけを行っているが、この問いを筆者なりに解釈し直し、「無限なもの、超越者の中で自己の限界性を徹底的に自覚する経験をするとき、かえって超越者からの光(「彼方からの光」)に照らし出されて、無限なもの(「別のまなざし」)が開かれて行くという『逆説的機能』にスピリチュアリティの本質があるのではないか?』とした。

本論では社会福祉実践現場の現実とワーカーのスピリチュアリティの相互作用全体を捉える中で、スピリチュアリティがいかに機能しているか、をリサーチクエストとする。とりわけ、この「別のまなざし」を生み出す「彼方からの光」に注目して分析を進める。

#### 4 方法と対象

障害福祉分野の入所施設(入所サービス)、グループホーム(共同生活援助)、特例子会社に勤務するワーカー7人(男性3女性4)を対象に約90分程度の半構造化面接を実施して、スピリチュアリティと実践の関係について語って貰った<sup>(14)</sup>。年齢構成は20代4人、40代3人、宗教的にはキリスト者4名、仏教者(仏僧)2名<sup>(15, 16)</sup>である。

面接は逐語記録として文書化し、修正版グラウンデッド・セオリーの方法によってコードづけをし、カテゴリー化した。分析はオープンコーディングから軸足コーディングに入ったところであり、選択的コーディングに進んでいない<sup>(17)</sup>。

対象となった各ワーカーのプロフィールを以下に記す。

(1) Aさん 20代女性、重度心身障害者対象のグループホームに支援員として勤務、3年目、明学社会福祉学科卒、社会福祉士。プロテスタントで信仰歴は10年以上。信仰へのコミットメントは強い。職場は人権理念の強い地域実践

志向の法人であり、通所施設を主体として日本社会の実践をリードして来た法人である。

(2)Bさん 20代女性、軽度知的障害や発達障害者が雇用される特例子会社にジョブコーチとして勤務、明学社会福祉学科卒後四年目、社会福祉士、精神保健福祉士。就職後仕事の行き詰まりの中で自ら受洗、信仰歴3年のプロテスタント。信仰へのコミットメントは強い。

勤務先は上場企業の特例子会社であり、障害者支援の理念が確立していない。

(3)Cさん 20代女性、視覚障害、精神障害等を重複するキリスト教系入所施設に支援員として勤務、3年目、明学心理学科卒。プロテスタントで信仰歴は7年以上。信仰へのコミットメントは強い。勤務先はキリスト教系施設で礼拝はあるものの、キリスト者職員は殆ど存在せず名目化しており、虐待もみられる。

(4)Dさん 20代女性、重度知的障害者対象の入所施設に支援員として勤務、3年目。他大学社会福祉学科卒。カトリックの幼児洗礼を受けていてアイデンティティは強いが、コミットメントは強いとはいえない。勤務先は県立施設を指定管理化した施設で、殺傷事件のあった「津久井やまゆり園」と似た重度者中心の入所施設である。

(5)Eさん 40代男性、軽度知的障害者対象の作業所に2年勤務後、仏教系の重度者中心の入所施設に支援員として1年半勤務。寺の子弟ではなく、僧侶の運営する「坊主バー」に出入りして自ら浄土真宗僧侶として得度、全寮制の学校で修行。2か所の寺で住職を経験するなど僧侶歴20年以上。社会福祉関係の資格なし。勤務先法人は法話等もあり、理念的には人権重視で一定以上の実践の質を目指している。

(6)Fさん 40代男性、精神障害者対象のグループホーム施設長、20年目。プロテスタントの牧師家庭生まれ。帰国子女。アメリカの神学校に入るもサッカー選手を希望、ケガで断念して福祉の道に入る。教会を一時離れたことがあるが、現在はキリスト教系法人で働くかたわら、教会を中心としてコンサート活動を

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

し啓蒙と終生型グループホーム建設のためのファンド・レイジングに努めている。社会福祉士、精神保健福祉士等の資格はなし。勤務先はキリスト者職員が殆どであり、非常時の夜間対応を要するホームのため、近隣に居住している。

(7)Gさん 40代男性、知的、精神障害重複障害者対象のグループホーム副施設長、社会福祉士。障害福祉関係の支援経験は2つの法人で通算8年。都内の浄土宗の寺に生まれ、幼少時に得度<sup>(18)</sup>し大卒後すぐに23歳で修行に入り僧職となる。その後地方公務員一般行政職として10数年勤務し、30代半ばより寺の仕事を副住職として手伝うかたわら、福祉の仕事始める。現在の法人は日本の低所得者福祉をリードしている法人で、ホームレス支援の一環としてグループホームも立ち上げられている。利用者は元ホームレスの他、触法障害者、元精神病院長期在院者等で構成されている。非常時の夜間対応はなし。

## 5 結果

分析によって得られた全カテゴリーとコードは表1の通りである。またサンプル数が特に仏教側で限られているため、理論的飽和を見ておらず、カテゴリー間の関係も明確とは言えないが仮説的に見えて来たところを図1としてまとめた。本論では主旨に即して大カテゴリー「置かれている現場の状況」のうちの〈利用者の大変な状況〉〈厳しい勤務状況〉の概略を記述した後、残りのカテゴリーを、コードを含めて詳細に記述していく。(以下、大カテゴリーを「 」, カテゴリーを〈 〉, コード, インビボコードを《 》で示す。)なお、表2~7には状況を浮き彫りにするために必要に応じてインビボコード<sup>(19)</sup>を記した。

### (1) ワーカーたちを取り巻く社会福祉実践現場の状況

「置かれている現場の状況」は〈厳しい勤務状況〉と〈利用者の大変な状況〉そしてそこから生じる〈過酷なストレスに曝される〉という事象から成り立つ



「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

表 1 活動分類項目の比較

大カテゴリー	カテゴリー	コード
置かれている現場の状況	利用者の大変な状況	重度者と中重度者の共存 AD 精神・身体・視覚等の障害の重複 ACDG 重篤な精神障害による不穏症状 ACDF 不穏の強い強度行動障害 E 嘘について金銭トラブルが絶えない G 職員への身体的、精神的暴力 ACDE
	厳しい勤務状況	シフトワークによる生活ストレス CDE 職員間の人間関係の厳しさ CD グレーゾーン支援の横行する職場 C マンパワー不足、低賃金 DE 個人にかかる過重な責任負担 ABF 役割期待が曖昧であることへのストレス B 職員の疲弊とバーンアウトの多発 CEF 支援の質を担保しようとすることによる負担 DEG
	過酷なストレスに曝される	利用者から強い罵倒、叱責、要求を受ける経験 ACDE 利用者対応における極度の緊張状況の持続 ADEF 状況に対応できない無力感 ACDG 感情を麻痺させる CD 追い詰められて自己コントロールを失う ACFG バーンアウトを経験する BG 専門職としてのモラルジレンマ BG
スピリチュアリティの機能	人間観のベース	利用者と支援者の本質的な平等 FG 隣人愛の対象としての利用者 ABC 救いを必要とする人としての利用者 ADG
	限界に面した時の祈り	命を預かる重さを感じた時 A 無力を感じる時の祈り AB 利用者の人生に関わる重い決断をするときの祈り A 利用者が苦しい時に神意を問い救いを求める CD ストレスを抱え極限に面した時に祈る E
	スピリチュアリティの揺らぎ	内なる優生思想に負けそうになる CDE 善悪の感覚を失って漂流する CD
	超越者に向かう運動性	自己の否定的側面(罪、人間としての限界)の自覚 ABCE 超越者の愛や慈悲の再発見 AE 自己の再受容 ABE 超越者との関係性強化 ABCE
	隣人へ向かう運動性	他者を支配する志向性からの解放 ABEF 利用者への深い共感 ABCDF 祈り心を持って支援をする ACE
	信仰の交わりに支えられる必要性	交わりに支えられる必要性 AC 職員と利用者の祈りの場の必要性 D メンバーがしんどい時にスタッフが集まって祈る F スタッフ間の信仰に基づくピアカウンセリング F
	職場またはSWエーツとの相互作用	職場エーツを下支えるスピリチュアリティ AG ソーシャルワーク専門職のエーツを下支えるスピリチュアリティ B 職場エーツを形成するスピリチュアリティ F 職場エーツに反発して独り立ちし、漂流するスピリチュアリティ CD

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

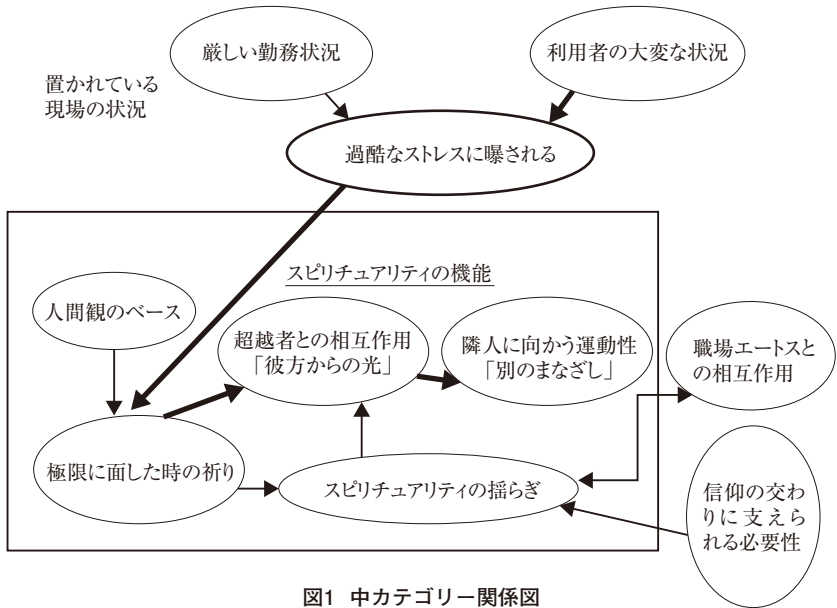


図1 中カテゴリー関係図

ている。〈過酷なストレスに曝される〉ことに中心的につながるカテゴリーは太い矢印で記した〈利用者の大変な状況〉である。このカテゴリーが主として「スピリチュアリティの機能」の運動性につながって来る。つまりワーカーたちを追い詰める過酷なストレスは主として利用者の状況に由来するものであり、殆どの場合、直接的なトリガーになっている。また、スピリチュアリティの動きも主としてそこに連動して見られる。

#### ① 〈利用者の大変な状況〉

まずは入所施設，グループホーム共に《重度者と中軽度者の共存》《精神・身体・視覚等の障害の重複》があり，重い障害にマッチした特別な身体介助を求められると同時に，精神的な支援を心がけることが常に求められる。加えて知的障害が軽度であれば《重篤な精神障害による不穏症状》を持っていたり

(ACDF)、重度であれば《不穩の強い強度行動障害》(E)を呈したりして、職員が《職員への身体的、精神的暴力》(ACDE)の被害に曝されることになる。ホームレス出身の利用者を擁するGのみは全く異なった、利用者が《嘘について金銭トラブルが絶えない》という状況を抱えている。特例子会社勤務であるBにはこのカテゴリーは存在していない。

## ② 〈厳しい勤務状況〉

ワーカーは入所施設であれば特に《シフトワークによる生活ストレス》(CDE)から逃れることは出来ない。Cはこの生活を「シフトに入って回っているだけの生活」と表現していた。個人の生活時間の確保が自由にならず、シフトからシフトの間をただ機械的に過ごしているだけという感覚の表現である。その他厳しい勤務状況の中で職員が疲弊し《職員間の人間関係の厳しさ》(CD)があり、後輩に対して過剰な叱責をしたり、日常の些細なことで支援に口出ししたりしてストレス負荷を強くする。一般によく言われるように常に職員の定着が悪く《マンパワー不足、低賃金》(DE)でもある。そのような厳しい状況の中で虐待が疑われるような支援が常在する組織風土《グレーゾーン支援の横行する職場》(C)が産まれてしまう。一方一定水準以上の支援の質を担保しようとする実践現場も多くみられてそのことがかえって首を絞め勤務状況を悪くすることも見られた。《支援の質を担保しようとすることによる負担》(DEG)。

グループホームや特例子会社では《個人にかかる過重な責任負担》(ABF)が重く、グループホームでは利用者の人生に関わる重大な決断を一人でしなくてはならなかったり、意思表示の出来ない利用者の意思決定を代理でしなければならなかったりする。特例子会社で《役割期待が曖昧》でパイオニアとして業務を自ら作り出す責任がかかっている(B)。

職員の疲弊はまた、バーンアウトの多発(CEF)につながり、ベテラン職員の退職が相次いだり、最悪の場合には自死が起きることもあった。Fは入職当

時3人の先輩職員の自死に遭遇している。

③ 〈過酷なストレスに曝される〉(表2)

このカテゴリーの中の最も重要なコードは《利用者から強い罵倒、叱責、要求を受ける経験》(ACDE)である。このカテゴリーは直接にスピリチュアリティに影響を与え、運動性につながって来る。

ワーカーたちは利用者からの精神障害や強度高度障害に由来する罵倒や要求に長時間、場合によっては一晩中、それも日常的に耐えなければならない経験にさらされている。《利用者対応における極度の緊張状況の持続》(ADEF)、それは人間としての限界に直面する経験である。それは場合によっては「精神的暴力」と呼ぶことも出来るだろう。今回のインタビューの中で一番印象的なものはDの経験であり、少しインタビューから引用してみよう。

去年の11月からいろんな施設を渡り歩いて来た大変な利用者がいました、その人は精神面で大変な人で、母親が自殺したのがトラウマで、結構周りの利用者が最近例えばトキオのこと(注 芸能人のこと)とかで、何でこの人こんなに責められているのみたく暴走したりして、最終的には自分のこと責めたりする。この人はとても軽度の人で言葉もすごくしゃべれるんですけど、自分で嫌だなと思うことがちょっとあると、職員に死ぬ死ぬとか、すごく言ったり殴ったりするんですけど、人を傷つけた分自分に返って来て、何で私やってしまったのと自分を責め始めたりするんですけど、その人は毎日が不穏なんです。不穏を探さないといけなくて、不穏になっている時が一番安定している時で、不穏じゃないときは逆に不穏なネタを探してはそこにヒットして、勝手に不穏になって周りに当たったりするんです。そこで周りに死ぬとか、生きる価値ないんだよ、とかいうんですよ。汚い奴だとか同じ服を毎日着てるだとか、職員のこともの

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

表2 カテゴリー〈過酷なストレスに曝される〉

コード	インビボコード
利用者から強い罵倒、叱責、要求を受ける経験 ACDE	利用者からの激しい罵倒に耐える A 利用者からの強い要求に応じる A 精神的暴力の利用者に対処できない C 言葉に頼ったコミュニケーションで強い要求や言葉が出ることにストレスを感じる C 利用者の言動による職員としての傷つき体験 D 毎日何度も不穏状態が長ければ一時間以上続くのに耐える E
利用者対応における極度の緊張状況の持続 ADEF	重度者の介助に追われる時にクレーム対応 A 常に付き添わなくてはならない極度の緊張状況 D 自傷場面での利用者の説得 D 鍵を使わないために体を張る必要 E 夜間対応がある為に緊張して夜眠れない F 殺されるかもしれない緊張のある介入 F
状況に対応できない無力感 ACDG	利用者の高齢化と機能低下に対して何も出来ない無力感 C 目の前で自傷行為をして苦しがついていても何も出来ない苦しさ D 利用者辛い思いをさせてしまう自分へのふがいなさ、無力感 A 支援を求めていたのに答えられなかった自分が許せない思い G バーンアウトした職員のサポートを仕切れなかった F
感情を麻痺させる CD	やっていくために疑問やショックを抑圧して忘れるようにしている C 虐待的支援を見て傷ついていたが、抑圧して忘れようとしている C 感情を麻痺させる必要性 D
精神的に追い詰められて自己コントロールを失う ACFG	利用者の前で泣いてしまう A ストレスの身体化 A 精神的に追い詰められて狂いそうになる C 精神的に追い詰められる F 現在に至るまで精神科薬を飲みながらの勤務 F 怒りをコントロールすることが大変 G
バーンアウトを経験する BG	疲弊してバーンアウト、身体化 B バーンアウトによる抑うつ状態の経験 G 気分転換によるバーンアウトからの回復 G
専門職としてのモラルジレンマ BG	組織に立つか利用者の側に立つかという葛藤 B 専門職としての、パターナリズムと自己決定のせめぎあい G

んな施設回っているんで見てるんですよ。頭がいいんですよ。まわりの人  
たちを巻き込むんです。そういう人から嫌なことを言われて、私も一回受  
けたんですけどもその人の前を通るたびに、言われてその人から死ぬと  
言われて、どうせその人は反省するんですけども、何でそんなことを言  
われなきゃいけないんだろうってすごく嫌な気持ちになるんです。

精神障害で不穏状態が強いこの利用者は常に不穏で、当たり散らす理由と相

手を求め、言葉による暴力や身体的な暴力を周囲に与え続ける。それだけではなく、この人は自死未遂を繰り返し、自らの肉体を傷つける。

私の来た頃がすごくて、タオルで自分の首絞めて、泡吹いて、倒れて、それきっかけに精神病院に入院したんですけど、戻って来て。エスカレーターして。(中略) この人が木のクズの破片で手首を切って、血を流しながらガリガリガリガリやっている時に、止めるまではできたんですけど、木の破片を外すために説得するのが、参っちゃったんですね。説得すればするほど、その人のペースに呑み込まれてしまって、わけがわからなくなってしまうって、説得しても、辛いんだよね、とか本当はこういうのしたくないんだよねとか、いうんですけどその人は私なんかいなくなればいいんだとか、どうして私のこと止めるのとか、私がしたいことを何故止めるのとか延々言われるんで、それを繰り返すだけでも10分以上かかり、きりがありません。それで他の職員さんが木を取り上げたんですけど、なんか、説得じゃ通じないんだって。でもそこで無理やり取るのも、何で取るんだよ、お前なんか嫌いだって、何で職員は私のしたいことやめさせんみたいな、その人にとって良くないことを止めているはずなのに、逆に責められちゃう。何で私のこと死なせてよ、とか。

このような利用者に対応するすべをワーカーは当然持たないため、強い無力感を経験することになる。《状況に対応できない無力感》(ACDG)また、利用者の自傷行動に反応するとそのことによって利用者はより一層自傷行為を強めるという行動療法的な見地から、組織的に対応すべき、という組織的決定にDは強い疑問を抱く。《組織のあり方(風土、方針)への疑問》(BCD)またそのために心を麻痺させるという対処をとらなければならなくなった。《感情を麻痺させる》(CD)。

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

(職員が反応すると利用者の行動が)強化されてしまうから、いちいち反応しなくていいよとか、思うつぼだからと言われるんですけども、目の前で利用者が傷ついているのにそれを放置するのはどうなんだろうと思うんですよ。結局傷がひどくなって治療する破目になったんですけども、私たちって利用者の何を守っているのか、ちゃんと守っているのかな、みたいな。利用者の痛みとかを受け止めなきゃいけないのに、私は受け止めて寄り添いたいと思うんですけども、逆に、そういうのを過度にしすぎると利用者にとってもよくない、最終的に利用者のペースに巻き込まれて、職員がダメになっちゃう。そういうのはあまり、近すぎても、遠すぎても、私この人にとって価値のない人間とされているんだと思われちゃうから、遠すぎず近すぎず、あなたは淡々と仕事していればいいというのを最初の頃に上の人に言われてた。(中略)

彼女が不穏で苦しんでいるのをただ、淡々と見ていけばいいって、どうにかしてあげたい見ていられない、という気持ちを麻痺させろ、と言われていたような気がして、私の中では納得できないです。最近はある程度麻痺させないとやっていけないと感じています。

《感情を麻痺させる》(CD)は虐待ギリギリの支援(グレーゾーン支援)の横行する現場で働くCにも「感情の抑圧」として語られる。(CはCさん、深は筆者)

C 職員がなんか疲弊してて、言い方がきつくなって、どこでも虐待の問題とかあると思うんですけども、何でそんな言い方するんだろうとか、職員の疲弊というか、職員が信仰を持たないので疲れちゃったりとか、自分も勿論疲れますけれども。疲弊してよくない言葉をかけていたりとか、一応キリスト教の施設なんだけどなーって。でも自分ではそれを変えることも出来ないからって。一年目から。

深 職員がそういうことをした場面でこういう場面があったみたいな例はある？

C 全部抑圧して忘れちゃっている。

深 忘れないと適応できないんだよね。

C 抑圧されちゃってるから今言えないんですけども、シャットダウンするような感じで、追い出したり。見てしまってもいちいち反応してたらやっていかれないので、反応しないようにしている。自分も職員がやっているのを見て傷ついたりしたんですけど、それを忘れちゃっているという感じで。

納得できないこと、受け入れがたいことを受け入れなくてはならない時に心を殺し、感情を抑圧して麻痺させ、しかもそれを忘却するという対処を行って仕事に適応しているのである。しかもCはそれを質問されても思い出すことが出来なかった。

《利用者から強い罵倒、叱責、要求を受ける経験》(ACDE)はまた、ワーカーに自己コントロールを失わせる。《追い詰められて自己コントロールを失う》(ACFG)。前述Cは発狂しそうになった、と表現する。Aは利用者の強い叱責にあい、泣きだして過呼吸に陥ってしまった。

脳性まひの利用者さんのところに入った時に、一年目で、社会福祉士として入ったんですけども介助は初めてで、未熟な部分があって、職員なのにこんなことも出来ないのか、と言われて、その人自身も精神的に課題があるかたなんですけれども、一晩中罵倒されたことがあって、体調面で悪くなり勤務中に泣いちゃいました。(中略)過呼吸になりましたね。利用者さんの手前、泣いちゃいけないと思いながらやっぱりすごく責めこまれるので、泣きたいという思いを必死にとめるので、呼吸が変になって過呼



「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

吸になりました。

F では原因はいつ利用者からSOSが来るか分からないという状況の中で、睡眠薬や精神安定剤を現在に至るまで服用しなくては眠れないという状況に置かれている。またGは虚言癖のある利用者に対応する中での怒りのコントロールが困難であるという。

このような中でワーカーは《バーンアウトを経験する》。バーンアウト経験<sup>(20)</sup>が直接に語られたのはBGであり、Bは身体化して肺炎になり長期の休みを取らざるをえなくなった。Gもまた休暇を取得してリフレッシュし直す契機が必要であった。しかし他の全てのワーカーたち、ACDEFにも色付けしたコードを通じてその兆候が見られる。「バーンアウト」の特徴は利用者に対する「脱人格化」, 「情緒的消耗感」, 「個人的達成感の低下」とされるからである。特にCはインタビューの印象では最もひどくバーンアウトしている。

## (2) スピリチュアリティはどうか機能しているか

### ① 〈人間観のベース〉(表3)

スピリチュアリティは〈人間観のベース〉となり、現場で利用者を支援する際の基礎となる。その特徴には人間のネガティブな側面に焦点を当てたものと、ポジティブな側面に焦点を当てたものがある。福祉現場で人間と深く関わるこ

表3 カテゴリー 〈人間観のベース〉

コード	インビボコード
利用者 と 支援者 の 本 質 的 な 平 等 FG	排除はいけないということを仏教から学んだ E 自己疎外も他者排除も同一線上にあるという信念 E 障害者も非障害者も本質的な違いはないという信念 FG だからこそ助け合わなくてはならないという助け合いの思想 G
隣人愛の対象としての利用者 ABC	隣人愛の対象としての利用者 ABC
救いを必要とする人としての利用者 ADG	神の救いの必要な人としての利用者 AD 利用者に人間の業を感じる G

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

とによって人間の中のどうしようもない、罪とか業とかいわれるものと否応なく向き合うことになり、救いの必要な存在として実感されるようになる。

G 仏教のことを思い出して、人間の欲望とか、業の深さをそんな言葉を思い出しながら接しますねえ。自分の欲求って言うか、コントロールできなくなると苦しみの連鎖になっていく。それを実感しますね。(中略)知的障害の現場で働いていた時に、人間として本質的な違いがないんだな、ってことです。障害とそうでないという違いってというのは相対的で、違いはないんだってというのは、今の職場で働いても変わらないですね。(中略)仏様から見ると悪にまみれてだれでも生きている存在なんであって、それは相対的なんだろうなあっていうことを考えながら、仏様の視点から言うと不完全という意味では一緒なのかなあ、と。

また、福音派のキリスト者たち(AC)には誰も罪人であり、悔い改めて救われなくてはならない人、といという利用者観がベースにある。一方神の愛の対象であり、かつ隣人愛の対象(キリスト教)、阿弥陀から平等に光を受けている存在としての人間(仏教)という肯定的な見方<sup>(21)</sup>もベースに存在している。

E ずっとこだわっているのは、やはり、特に「雑草」なり「害虫」と呼ばれる生命の事です。横浜でもホームレス殺人事件があったと記憶していますが、排除です。自分にとって都合が良い悪い、あるいはそれが「社会的」なりの言葉で正義的なオブラートで包まれたりして見え難くなったり。仏教を学ぶようになり、他人を排除する事も自分を排除する事も結局は同じなんだ、という事を教えていただきました。都合が悪ければ「こんな私なんて…」になる。それは自分自身を排除する事であると。

② 〈極限に面した時の祈り〉

過酷なストレスに晒された時には神仏に祈ることが出来ることによって、ワーカー自身が守られるという緩衝機能を有している。祈るのは《命を預かる重さを感じた時》(A), 《無力を感じる時の祈り》(AB), 《利用者の人生に関わる重い決断をするときの祈り》(A), 《利用者が苦しい時に神意を問い救いを求める》(CD), 《ストレスを抱え極限に面した時に祈る》(E)である。

A 自分が何も出来ないということに医療面でぶつかるときに、何をすべきですかとか祈りますね。あとは胃ろうを増設するところとか、意思決定が出来ないところでこの人にとっては何がいいんだろうとか、最善の決断なのかということ、家族もあるんですけども施設側の意向・意見として求められる時に、人の人生にかかわる大きな決断というので、私にはこう、難しい時に神様に祈らざるを得ないと感じます。

D 彼女が苦しい時に、どうしたら彼女を救えるんでしょうか、って神に聞いちゃいます。どうしたらいいんでしょうって。仕事の前に私たちを守って下さいとか、大変なことがあった後に一日の後に感謝したり、明日もお守りくださいみたいな感じですよ。大変な時にこの状況をどうしたらいいのでしょうか。救ってくださいみたいな感じですよ。彼女の幸せになる日は来るのかな、みたいに思いますよね。

E その利用者が不穏になると、施設の男性寮内の空気が一変しますし、また、他の事が出来なくなったりして、私のストレスが大変な事になります。そんな時に時折、口から勝手に「南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛」と念佛が出て来ます。

表4 カテゴリー〈スピリチュアリティの揺らぎ〉

コード	インビボコード
内なる優生思想に負けそうになる CDE	心を見張っていないと何故この人たちのためにこんな思いをしなければいけないのかという考えに流されそうになるという自覚 C 自死未遂を止めることが果たしてその人にとっていいことなのかどうかわからなくなる D 死にたいという気持ちを受け止めて楽にしてあげたい D 利用者が煩わしく排除したいと感じる E 心中で利用者を殺してしまうことが多々あった E
善悪の感覚を失って漂流する C	グレーゾーン支援を受け入れて共に生きるという理想からずれている自分を感じる C

③ 〈スピリチュアリティの揺らぎ〉(表4)

過酷なストレスを経験し、全員が多かれ少なかれバーンアウトの兆候を示す中で、幾人かのワーカーに〈スピリチュアリティの揺らぎ〉が経験される。すべてのワーカーがストレスを感じ心理的な反応、例えば無意識に言動が荒くなったりはあるが、もう少し意識化されたものがこのカテゴリーに当たる。

利用者を同じ人間と見ることが出来なくなったり、いなければいいと排除を願ったり(CE)カトリックでありながら死にたいなら死なせてあげることが望ましいと考えてしまったり(D)、というような《内なる優生思想に負けそうになる》ことがある。

E ○さんは施設に入っている利用者です。家族が大変だから、施設に預けている利用者です。大変なのは当たり前です。でも、○さんに対して「こいつさえないなければ…」と、○さんを心の中で殺してしまう事が多々ありました。

D 自分としては解放してあげたい、本当は良くないと思うんですけども死にたいという思いも受け止めてあげたい。そう考えていることを受け止めて愛してあげたいな、みたいな。どんなに大変な人でも愛して受け止めてあげたいという気持ちがあるんで、死にたいとか傷つけたいという気

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

持ちも受け止めておげたいんですけども、受け止めたところで、その人が救われるのかなって。難しいな<sup>(22)</sup>。

④ 〈超越者との相互作用〉「彼方からの光」(表5)

バーンアウトをもたらすような過酷なストレスやスピリチュアリティの揺らぎには〈超越者との相互作用〉〈隣人に向かう運動性〉の2つが対抗して機能している。ただし、それはバーンアウトを全く防ぐ、ということではなく揺らぎながらも恒常性を保つ力と言っていいだろう。

《自己の否定的側面(罪、人間としての限界)の自覚》(ABCE)ではワーカーは超越者の前で自分が罪のある人間であること、愛のない人間であることを自覚し、自分が惨めな限界に縁どられた人間であることに直面する。

A 愛がないなあと感じていて、ダメだなあと思っていたんですけど

表5 カテゴリー〈超越者との相互作用〉「彼方からの光」

コード	インビボコード
自己の否定的側面(罪、人間としての限界)の自覚 ABCE	否定的な自己との出会い A 自己不安を解消することの限界を知る B 神とのつながりの薄さの自覚 C 罪悪深重煩惱具足の自分の自覚 E 学生時代同級生を排除したいと思った経験の想起 E 阿弥陀如来に自分の正体を見せられたという意味付け E 利用者に詫げる E
超越者の愛や慈悲の再発見 AE	神の愛の再発見 A 阿弥陀如来の摂取不捨の心に立ち返る E
自己の再受容ABE	自己の再受容 A 限界のある自己の受容 B にもかかわらず、かけがえのない自分、そして他者という気づき E 自分を大切に丁寧な生活をするこの大切さ E
超越者との関係性強化 ABCE	神との関係回復・強化 A 神への委託 A 自分を神に委ねることが出来るようになる B すぐには解決の出来ない組織の問題をどうしたらいいか祈って聞く B 神とつながっていると余裕が生まれる C 聖書の言葉が実感をもって迫る C 信仰に立ち返り続けるために毎朝晩に本尊に手を合わせる E 自分を委ねて力をいただく E

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

も、ヘルパーさんの方から私の言葉遣いが荒いのはどうなのかと上がったというふうには上司から、大きな会議で特定せずになんですけれども状況から言って私だなというのが分かるんですね。そういうふうな伝え方をしている、凄く落ち込んだというか、信仰のない人が出来ていることを神の愛を知っている自分が出来ていない、しかも、ノンクリスチャンからも指摘されるような態度だったんだなということを思うと、一番最初に地域に出て行ってノンクリスチャンの間で働いて、という自分がすごく恥ずかしくて証にならないという感じでした。

E 親鸞の言葉で「悪性さらにやめがたし、ころは蛇蝎のごとくなり」というのがあります。それは、まさに罪悪深重煩惱具足の私を照らし出す言葉でした。(中略)でもそれは自分の都合の良い人としか生きようとせずに、都合の悪い人は殺そうとしている私の正体を見せてくれただけの話です。○さんを通じて、阿弥陀如来が私の正体を見せてくれただけの話です。私にとって都合が悪ければ、心の中で殺してしまうのが私という存在です。そんな罪深い存在でしかありません。

そのような否定的自己を自覚させられたワーカーは《超越者の愛や慈悲の再発見》(AE)を経験する。超越者に受け入れられている自分を体験し、再び自分自身を受容して《自己の再受容》(ABE)、《超越者との関係性強化》(ABCE)していく。それは多くは自己を超越的存在に委ねるという姿勢の獲得や強化である。

A こういう自分の姿というかすべて受けていたものなんだな、という風にして愛だとか、志だとか神から与えていただかなくては自分には何もないなと感じて、ダメなのにそれを求めずに仕事に臨んでいたなと感じて、

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

やはりそれでも、受ける前の姿がそれでも愛されているというところに、感じた時に、自分自身を否定的にならずに、自分自身の姿はこれでしかないんだなと思い、それでも愛を注いで下さる神様という存在に気付いて、人との関係というよりも自分と神様との関係というのの回復の方が先だったんです。

B 今ある自分を認めていく必要があると思う。苦労の中で神様に与えられた経験の中で与えられて来たこともあると思いますし、自分にはどうすることもできない出来事とか、まだまだ経験を積まないと出来ないことが沢山あって、それをたぶん、今すぐ得ようとしてはいけないんだな、神様のタイミングで与えられるのを待たなきゃいけないんだな、と思えるようになって、解消されて来ました。今やれることをやればいいんだなと、最近は思えるようになりました。

E ○さんに対して「こいつさえいなければ…」と、心の中で殺してしまうような存在でしかありません。そして、そういう存在としての私しか、この世には居ません。他の誰とも違う、たった1人のかけがえのない人生の私です。それは○さんも同じです。だから、「ごめんなさい」と、○さんに謝罪します。「如来の摂取不捨(えらばず、きらわず、みすてず)の心を学び、真実、自分自身のしたいこと、しなければならないこと、できることを、他人とくらべず、あせらず、あきらめず、ていねいな生活をしていこう」という、言葉を自室の本尊の横に掲げています。施設への出勤前、帰宅後には必ず本尊に手を合わせて念佛申していました。

キリスト者であるAはいわば試練の中で愛のない自分に出会い、愛や意志自体を神から与えられなければ何も持っていない自分を見ている。そしてそのよ

うな惨めな自分が神に受け入れられていることを体験して自分を受け入れ、神との関係修復をしている。このプロセスはキリスト教プロテスタントの日常的な用語で言えば「悔い改め」あるいはより大きくキリスト教霊性の中で捉えればルター的な「信仰義認の霊性」といえるだろう。ルターにおいては試練にあって自己に絶望する時、信仰によって目を神に転ずることが出来れば、神秘主義的な「脱自」の経験が成立する<sup>(23)</sup>。Bにはそのプロセスはやや不明瞭だが、神との出会いによって自己受容し、自分の限界を受け入れることが出来たことが語られている。

Eは浄土真宗の仏僧であり、試練の中で阿弥陀如来から自分の罪惡に満ちた姿を見せられただけ、と捉えている。そしてそのような自分が攝取不捨の如来の慈悲によって受け入れられかけがえのないものとされていることに出会い直し、阿弥陀に対する帰依の心を深くして念仏し、自らの生活を「念仏申さるるように」慎ましく正していこうとしている。これは「悪人正機の霊性」と呼んでよいだろう<sup>(24)</sup>。またここには利用者も同じようかけがえのない存在とされているという気づきが見られ、他者に詫びるという次の〈隣人に向かう運動性〉が見られている。

このようなプロセスがインタビュー対象者の全てに明確に見られたわけではなく、信仰へのコミットメントの比較的弱いDや福祉実践のキャリアの長いFGでは見られなかった。信仰の自覚性が薄いか、このプロセス自体が自明になっているため語られなかったのかと推察される。

##### ⑤ 〈隣人に向かう運動性〉「別のまなざし」(表6)

これは〈超越者との相互作用〉と非常に密接な形で「押し出されて」玉突きのように出てくる運動性である。まず、自己の罪や無力や限界性を思い知り、その自己を委ねるようになったため、課題を抱えた他者の人生を善意からであっても自分の手でどうにかしよう、救おうという「いきみすぎ」から解放され、



「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

表6 カテゴリー〈隣人へ向かう運動性〉「別のまなざし」

コード	インビボコード
隣人を支配する志向性からの解放 ABIEFG	他者支配からの解放 A 利用者の大変さを神に委ねる B 自己の独善性に気付いて利用者に詫げる E 背負い込まない支援 FG
利用者への深い共感 ABCDFG	利用者への深い共感 ABD 隣人とは誰かと問い、その立場で組織と闘う B 自然と相手も心を開いて語ってくれる C 利用者理解が深まる C 泣くものと共に泣き、喜ぶものと共に喜ぶ C 利用者の苦しみへの深い共感 F 利用者の人生の大変さを知り、そこに共感する F 利用者の言葉を拾って共感し、行動に繋げる F 利用者を一人にはさせない、という思い F 仏教から人間を捉えているので困るが、人間嫌いにならない G
祈り心を持って支援をする ACE	祈り心をもって支援する A 信仰を技術に変換して伝える A 神とつながっている時には愛の循環の中に置かれる C 阿弥陀如来の摂取不捨の心に立ち返った支援をする E キリスト教色は出さないが自然と信仰が伝わる支援 F

手を放して委ねていく《隣人を支配する志向性からの解放》(ABIEFG)がある。

A ちょっと嘘をつきがちな利用者さんを自分がどうにかしなきゃ、と思っていたから声を荒くしたりとか言葉を強くしちゃったなと思ってて、(中略)最後はその人の決定だったりとか人生というところで、自分でその人を支配しようとしていた自分の姿に気付いて、本当の責任は神様が負って下さるし、自分はそこにいるだけなんだな、ということで荷が下りたんですね。根本的な問題とかその人が苦手なことは変わらないんですけども、私がどうしたいとかその人の人生にかかわる決定を自分の意志とか、支配したいという思いから解放したいということが、今は自分自身の問いに対しては答えだったなと思います。

B (その利用者は)幸せになれるのかなという不安も正直感じてしまうようなケースなんですけれども、でもそうですね、今後のことは私にはどう

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

することも出来ないから、神様に委ねますと祈ってその反省会に入ったら、ちょうど窓の外に虹がかかっている、約束の虹、ああ大丈夫なんだなと思ったんです。

次に自分が超越者から受け入れられていることを体験したが故に他者に同じようにしようとするところから生じる《利用者への深い共感》(ABCDFG)があり、超越者の愛や慈悲を利用者に流そうと志向し、祈りつつ行う《祈り心を持って支援をする》(ACE)が見られる。

A クリスマンとしてはこの人たちが救われるためにはどうしたらいいかとか迷うんですけども。でもなんかこう、祈り心をもって仕えるというところで、かかわるのはその人たちの人生の一瞬なんですけれども、一瞬でも神様の愛とか存分に感じて欲しいなと思うんです。

C 私が神様とつながっている時はみんなもなんかそれを感じてくれて、例えばガンで療養しているひともいるんですけども、いつもは職員には拒否的なんですけれども私には心を開いてくれて、ボディタッチしてた時にCさんてクリスマンなんだって。他の人はしないもんで神様の愛とかが利用者さんに流れているのかなというのがあって、神様との関係はすごく大事というかなくしては出来ない。盲聾の人とかもボディタッチしたら泣いちゃって、これって神様の愛だなと感じます。そういうのは感謝というか、神様なしでは自分は人に仕えられないな、と思います。神様につながっていると会話してても人の内面が出てくる。昔のこととかつらかったこととかが出て来て、この人はこういうところで葛藤があって、成育歴で環境でとかどんどん関係が深まっていく。

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

Bは少し異なり、キリスト者として隣人とは誰かを問うた上で、実践現場で不利な立場に置かれている利用者の立場に共感し、組織と闘っていかうとする。

B 自分にとっての隣人は誰か、というのは常に問いかけていると思うんですね。会社から見ればOさんにこのまま農業チームに残って貰ったら耕運機を落として、労災になってもおかしくなかったんですけど、事故になって会社全体の問題になっていくかもしれない、というリスクを考えますよね。そこは考えなきゃいけないと思うんですけど、本人は凄く農業に思い入れを持っていて、(中略)農業が好きでそれに向かって努力しているので、環境を整えば続けていって欲しいなと思うんですよね。彼の立場で会社に言っていかななくてはならない。自分にとっての隣人は誰なんだろうと思いますね。ただ、そこを闘っていく。これからそこを戦わざるを得ない。社長が替わるのでこれから彼のために戦わなくてはいけない。

Fには《利用者への深い共感》のコードが多くみられていて、利用者の一言を拾って実践に繋げていく志向性が顕著に見られる。

○さんは僕が入った時からいたメンバーで82歳なんですが、自立支援法に変わって(グループホームが)通過型に変わって、出ていかなきゃならなくなった時に、「いや、俺一人だよ」って泣き始めたんですよね。(中略)その方が行政に「ホームをでなさい」と言われた時に、「障害者は姥捨て山か!」って怒鳴ったんですよ。すごいおとなしい人なのに。何かその言葉が強くて心に刺さって。僕はグループホームが姥捨て山と思っていたんですよね。(中略)その方がホームを出る時に「俺が(永住型のホームを)建てて!」と思わず言ってしまったんです。

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

Fはグループホームを退去して高齢者施設に入居せざるを得なくなった天涯孤独の利用者が、職員たちと家族同然に暮らしてきて、一人になりたくないと泣き始めたことに動かされて永住型のグループホームを建てる約束をしてしまう。そして現在も資金を調達すべく活動を継続している。

#### ⑥ 〈信仰の交わりに支えられる必要性〉

一連のプロセスの外側でキリスト者ワーカーによって語られるのは祈りの場、祈りの交わり、信仰者同士の語り合いの必要性である。Aは希求しつつも勤務先では得られないからそのような交わりを所属教会に求めなくてはならない。Cは自らが導いた同僚との交わりを心の支えにしている。Dは祈りの場が職員自身のためにも利用者のためにも必要だと感じている。Fは唯一職員同士のピアカウンセリング、辛い時の祈り合いの場を持ち、それによって支えられている。

#### ⑦ 〈職場またはSWエートスとの相互作用〉(表7)

このカテゴリーもまた、一連のプロセスの外側にある職場エートスまたは専門職のエートスとの関係性を示すカテゴリーである。まだこのカテゴリーはワーカーのスピリチュアリティは職場のエートス、または専門職としてのエートスと相互作用してそのワーカー個人の「思想」を作り上げる。まだ経験の浅いワーカーであるA～Eはそれほど思想化は進んでいるとはいえないが、FG特に、Fでは現場における諸経験とスピリチュアリティとの相互作用、往復が長年にわたって繰り返された末、思想化されている。

職場のエートスが進歩的かつスピリチュアリティと親和性がある場合、ワーカーはスピリチュアリティに下支えされてエートスに積極的にコミットする(AG)。また職場のエートスからスピリチュアリティの広がりや深まりを受け取る。《職場エートスを下支えするスピリチュアリティ》(AG)。

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

表7 〈職場またはSWエートスとの相互作用〉

コード	インビボコード
職場エートスを下支えするスピリチュアリティ AG	周囲にとって大切な存在としての利用者 A 利用者を能力でみない職場のエートス A 信仰とジレンマを起こさないでむしろリードする職場エートス A 組織の理念と信仰の親和性 G 仏教者としてというより市民として出来ることをする G 浄土宗の弱い部分を補う現世での実践をしていく G ソーシャルワークの知識を自分の思想化 G 信仰に下支えされた専門職の倫理で感情をコントロールG正義を追求する生き方 G 現世を浄土に近づける G
ソーシャルワーク専門職のエートスを下支えするスピリチュアリティ B	利用者の強みを見ていく必要性 B 利用者の立場に立ってアドボケイトして闘う B
職場エートスに反発して独り立ちし、漂流するスピリチュアリティ CD	組織のあり方(風土、方針)への疑問 BCD 内なる優生思想に負けそうになる CD 善悪の感覚を失って漂流する C
職場エートスを形成するスピリチュアリティ F	フラットで自然体の利用者との関わり F 利用者への深い共感 F 利用者に対する信頼感 F 信仰に基づく共有された楽観主義 F 資格を持っていないのにやれている施設 F

A 本当にその人を取り巻く家族や人にとってその人の存在というのはものすごく大きなものなんだなという風に思います。その人たちが置かれている人間関係の中で築いているコミュニティがあって、存在がまず認められているというところですごいな、と思います。私がクリスチャンでその人たちが愛されていますよ、という前にそこで、その人の価値が認められているということで。うちの法人には、この人は介助量多いから受けないでおこうとか、この人の介助量が多いからとか、意志疎通ができないからというのでその人の価値を測っている職員はいないなと思うので、そういう風土の中で入れたというのは、迷いがないというか、法人でこうとらえているけれども自分はこうは思わないとか、ジレンマがないところではすごいいい法人に入ったなと思うんですよ。

深 すごくそれはね、話聞いていて、思った。人間観のところでは他の現場だったら出てくるかと思うんだけど、そこのところが、あなたの法人

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

はそういうところで人権とかの意識で先を走っているんだよね。そのジレンマがないよね。

A むしろそっちに引っ張られるというか。

深 専門職としての倫理と信仰って、どんな関係ですか。例えば法人のポリシーに触発されているとか。

G そうですね、法人のポリシーは受け入れる人を限定しないところがあって、浄土宗系の教えというのは、どんなに罪を犯した人でも信仰を持てば阿弥陀様に救われるというのがある、それは法人を選んだ時にそう感じたというよりも、入ってみて親和性があるなど感じてきたんです。そういうどんな人でも救われるべきだという浄土宗の世界観と法人の理念というのは重なる部分があるっていう、逆に言うとそういう組織であってほしいという気持ちがあります。

(中略)

深 自分の宗教家としての深まりに実践がかかわっているということはないですか。

G 一つ浄土宗は来世のことに重点をおいて、来世で悟りを開く。じゃあ、今の世界でどう生きていくか。それが弱いというか、明確なものがない。今の世界をどう生きるか。阿弥陀様の世界を今の世界にしていく、それは浄土宗僧侶として見果てぬ夢ではあるけれど、0.1ミリでもそういった世界にするように生きていくのが道しるべなのかな、方向なのかな、と感じています。

職場のエートスがスピリチュアリティと親和性がない場合、ワーカーは専門職としてのエートスにコミットしてスピリチュアリティはそれを下支えする。《ソーシャルワーク専門職のエートスを下支えするスピリチュアリティ》(B)。

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

Bの場合、スピリチュアリティが利用者の強み(ストレングス)を見て行くとか、アドボカシーと言ったようなソーシャルワークの中心のエートスを支え、内実を与えている。(前掲、⑤B参照)

職場のエートスがスピリチュアリティと親和性がなく、《組織のあり方(風土、方針)への疑問》がある場合、〈スピリチュアリティの揺らぎ〉が見られ、特に善悪の判断を失って周囲に合わせ、これでいいのか、ずれていると思いながら日々の支援をこなすような《善悪の感覚を失って漂流する》が見られる。

スピリチュアリティが組織内で共有され、行きわたっている場合には現場で体験される現実との相互作用によって時間の経過と共に思想化し練り上げられて行く。カテゴリーが飽和していないので仮説的なことしか述べられないが、信仰を同じくする者の多いFでは専門職も驚くほど少ない中で一定以上の質の高い支援が展開されている。それは〈超越者との相互作用〉〈隣人に向かう運動性〉と区別出来ない、あるいはその延長線上にあるエートスに支えられた支援である。例えば《フラットで自然体の利用者との関わり》(F)は《自己の否定的側面(罪、人間としての限界)の自覚》があり《隣人を支配する志向性からの解放》があったところで生まれてくる。つまり人間としての自分には限界があり、他者の人生を究極的にはどうにもできないことを知ることから、抱え込まない気負い過ぎないフラットなかかわりが生まれる。《利用者への深い共感》(F)、《利用者に対する信頼感》(F)は《超越者の愛や慈悲の再発見》や《自己の再受容》の経験の先にある。《信仰に基づく共有された楽観主義》は超越者に自己を委ねるといった関係性の強化に由来する。

深 自然体でやれるというところで、自分の信仰と実践との関わりはどんな風になっていますか。

F いい風に言えば神様が守ってくれているから大丈夫だよ、というのが僕も他のスタッフもスタンスです。そんなにパニックに陥らなくても、う

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

ちのスタッフはみな強烈な過去の持ち主なので、(中略)信仰的には何とかしてくれるし、困っている人がいたら手を差し伸べなさいということが自然にやれてる。というところは何かメンバーさんが何かしんどい時にスタッフで集まって祈ったりできるのは相当有利。

スタッフは各自大変な過去を祈って超えて来ているので、自己を神に委ねることに慣れている。大変な時にはスタッフで集まって祈ってそうする。支援も神に委ねつつ自然体であることが語られている。

## 6 考察

全体の考察として見えて来たことは殆どのワーカーがバーンアウトまたはスレスレの状況を経験するほどの厳しい勤務状況に置かれたことがあるということである。そしてその中でスピリチュアリティは利用者観のベースを基本的に形作るほか、極限における祈りをもたらす。

更にスピリチュアリティの揺らぎを体験する時、限界に縁どられた否定的な自己を突き付けられ、にもかかわらず超越者に受け入れられている自分を体験し、再び自分自身を受容し、いよいよ超越者との関係性を強化する、つまり自分自身を超越者に委託するという動的なプロセスを持っていた。これが「超越者との相互作用」つまり「彼方からの光」である。

そして「彼方からの光」に押し出されて玉突きのように出てくる運動性が「隣人に向かう運動性」つまり「別のまなざし」である。自己の罪や無力や限界性を思い知り、その自己を委ねるようになったため、課題を抱えた他者の人生を善意からであっても自分の手でどうにかしよう、救おうという「いきみすぎ」から解放され、手を放して委ねていくことが出来るようになり、自分が超越者から受け入れられていることを体験したが故に他者に同じようにしようと



「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

して、利用者への深い共感を示すようになり、超越者の愛や慈悲を利用者に流そうと志向し祈りを以て支援を行うようになる。

つまり現実に抗しうるスピリチュアリティの機能とは、思想化した(宗教的)実践哲学ではなく、方法論化ましてや技術化切片化したものでもなく、全体的かつ動的で実存的なプロセス、超越者との「我と汝」の対話(マルチン・ブーバー)から生まれ、人間を内側から突き動かし、隣人に向かわしめる力そのものである。

無論、本調査でもスピリチュアリティは長い実践の積み重ねを経れば経るほど、「思想化」に向かっていた。しかしそれは単なる実践哲学ではなく、「彼方からの光」と「別のまなざし」を内包した哲学である。

しかし、この「彼方からの光」と「別のまなざし」は技術移転、汎用性の確保が難しい。つまり個別宗教の伝道とならざるを得ないからである。結果的に日本社会では特に宗教性をなるべく薄めた形での実践哲学または方法論として普及するしか方途が見いだせないという現実は存在しているわけである。

## 7 今後の研究課題

本論では残念ながら分析途中であり、軸足コーディングの途中である。特に組織とスピリチュアリティの関係性についてはかなり仮説的なことしか記述できていない。また分析対象となるスピリチュアリティもキリスト教と仏教の浄土教系ということで、比較的類似性が指摘されるスピリチュアリティである。仏教者のうちでさえ例えば禅仏教や密教等に対象を広げた時に何が見いだされるかは未知数である。

コーディングを選択的コーディングに進めながら、スピリチュアリティの幅を広げていくことが今後の課題である。

註

- (1) スピリチュアリティ、信仰、宗教という用語はそれだけでも研究に値するものであり、カンダはその著で一章を割いている。ここでは操作的にスピリチュアリティは人間の生の一つの過程であり、意味・目的性・ウェルビーイングの探求を中心とし、自分自身・他者・他の存在・宇宙そしてそれがどのように理解されていようとも究極的実在との関係の中でその探求がなされ、それが中心的に優先事項とされ、その中には超越的な感覚が含まれている、とのカンダの定義を採用しておく。宗教とはそれに対して価値・信条・象徴・行動・体験の制度化された様式であり、スピリチュアリティ・信者のコミュニティ・時間を超えた伝統の伝達・コミュニティ支援機能を含むものである。信仰は本論においてはあまりスピリチュアリティと区別されていないが、欧米のソーシャルワーク研究では信仰という概念はスピリチュアリティや宗教ほど用いられない概念となっているため、本論もその動向に従ってかなり使用を限定している。カンダ, E 2014 『ソーシャルワークにおけるスピリチュアリティとは何か』木原活信他訳, ミネルヴァ書房 pp.87-146.原著Canda, E. 2010 “Spiritual Diversity in Social Work Practice: The Heart of Helping” Oxford University Press.
- (2) 安藤泰至, 板井正斉, 深谷美枝, 頼尊恒信, 寺戸淳子
- (3) 安藤泰至 2018「優生思想と『別のまなざし』:宗教・いのち・障害と共に生きること」『宗教と社会貢献』8(1) pp.3-23.  
深谷美枝 2018「社会福祉実践の現状におけるキリスト教スピリチュアリティの機能—『障害福祉ソーシャルワーカーの語り』より—」『宗教と社会貢献』8(1) pp.25-53.  
寺戸淳子 2018「市民社会における〈ラルシュ〉共同体運動の意義:『権利』と『祝祭』」『宗教と社会貢献』8(1) pp.55-73.  
頼尊恒信 2018「『社会モデル』の思想と宗教:共生する社会の構築に向けて」『宗教と社会貢献』8(1) pp.75-99.
- (4) タイトル名「社会福祉実践現場の現状におけるスピリチュアリティ」
- (5) 深谷美枝 2018 前掲論文。
- (6) 安藤泰至 2017.9.16 日本宗教学会第76回学術大会パネルディスカッションレジュメ, 「『人間になる』こととしてのスピリチュアリティ」
- (7) 森岡正博 1998「生命と優生思想」竹田純郎他編『生命論への視座』大明堂, pp.115-133. 森岡は更に2001では「予防的福祉論」と「障害者共生論」というダブルスタンダードの間を生きるということ, つまり「自分の子どもが障害があったら中絶しよう」と考えることと, 「今生きている障害者を差別しない」ことは一人の人間のなかで両立しえないと述べる。森岡正博 2001『生命学に何ができるか—脳死・フェミニズム・優生思想』勁草書房, pp.285-397.
- (8) 安藤 2018 前掲論文, p.12.

- (9) 安藤 2018 前掲, p.16より引用。
- (10) ジャン・ヴァニエ 浅野幸治訳 2005『人間になる』新教出版社。
- (11) イヴ・ジネスト, ・ロゼット・マレスコッティ 本多美和子日本語監修 2016『「ユマニチュード」という革命—なぜ、このケアで認知症高齢者と心が通うのか』誠文堂新光社。
- (12) 向谷地生良 2015『精神障害と教会—教会が教会であるために』いのちのことは社。同書は珍しく向谷地のキリスト教スピリチュアリティがよく見てとれる書である。
- (13) 前掲日本宗教学会第76回学術大会パネルディスカッションレジュメ。
- (14) 1人Eさんのみ、ご本人の体調の関係で面接が出来ず、往復のメールインタビューとなった。分量的には一万字近く、質量ともに90分インタビューと同等以上となっている。尚、A, B, C 3人は深谷前掲論文の分析資料を分析手法を変えて再使用している。DEFGは新たに資料収集したものである。
- (15) 仏教者のインタビューは一定の知識がある自覚的な信仰者ということで、仏僧とした。
- (16) 尚、ほぼ同時にキリスト教研究所に投稿した「社会福祉実践におけるスピリチュアリティの機能—『障害福祉ワーカーの語り』より—」とは材料の半分は同一であるが、分析手法を全く変えていて、本論文が現実とスピリチュアリティの相互作用に着目して諸要素を分析するのに対し、当該論文は語りの面白さを中心とし、大づかみにスピリチュアリティの機能を抽出しているに過ぎない点、全く異なる論文であることを記しておく。
- (17) グラウンデッド・セオリーアプローチでは資料にコードづけして類似の概念を集めてカテゴリー化しカテゴリー、特性、次元を生成するオープンコーディング、カテゴリー間の関連付けを探り、カテゴリー、特性、次元を階層的に組織化する軸足コーディング、中心となるカテゴリーを同定し、選択的にデータを収集して理論の生成と精緻化を目指す選択的コーディングがある。
- (18) 浄土宗において得度は幼児洗礼のような意味を持ち、修行に入ることを意味しない。
- (19) インビボコードとはインタビューの話者の言葉を生かしたコードのことである。
- (20) 「バーンアウト」はアメリカの心理学者フロイデンバーカーによるもので、一種の心因性鬱病とも言われ対人援助職が意欲を失ってしまう症状のことであり、特徴は利用者に対する「脱人格化」、「情緒的消耗感」、「個人的達成感の低下」とされる。
- (21) 親鸞は、阿弥陀如来の救いのはたらきを光にたとえて示し、「解脱(げだつ)の光輪(こうりん)きはもなし 光触(こうそく)かぶるものはみな 有無(うむ)をはなるとのべたまふ 平等覚(びょうどうかく)に帰命(きみょう)せよ」と浄土和讃のうち「讃阿弥陀仏偈和讃」の冒頭にある。平等ということへのコミットメントは強いものがあり、誰でも光を受けているということに制限を加えるということは結局自分も排除するこ

「彼方からの光」「別のまなざし」とは何か

とになる，という考え方が見られる。

浄土真宗本願寺派 <http://www.hongwanji.or.jp/mioshie/howa/min141120.html>,  
2018年9月3日閲覧。

- (22) Dはここでは利用者が自死したいと願えばそれを受け入れてあげること，つまり安楽死を認めることが愛であると考えている。しかし，それはカトリックの教えに即してはならず，むしろ，世間一般にある安楽死の考え方に無自覚に流されていると言える。
- (23) ここに神からの「引き寄せる」働きが聖霊を通して同時に生じ，自己否定と自己超越(拉致)の二つの運動が同時に起きることになる。これがルターの宗教的特質であり，「呻きと拉致の同時性」と呼ばれる。金子晴勇 2000, 『ルターとドイツ神秘主義』創文社, p.320.
- (24) 金子大栄校訂 1979, 『歎異抄』岩波書店, p.39-40.